

中学校

平成 14 年 度

# 教育研究員研究報告書

国

語

東京都教職員研修センター

平成 14 年 度

教育 研 究 員 名 簿 ( 国 語 )

	区 市 町 村	学 校 名	氏 名
第 1 分科会 (音声言語班)	新 宿 区	牛 込 第 二 中 学 校	○長谷川祥子
	練 馬 区	開 進 第 一 中 学 校	大川 満恵
	葛 飾 区	青 戸 中 学 校	須賀 恭子
	立 川 市	立 川 第 七 中 学 校	山本 武
	西 東 京 市	田 無 第 三 中 学 校	丸山 文代
第 2 分科会 (文字言語班)	港 区	高 陵 中 学 校	倉橋 和子
	江 東 区	深 川 第 八 中 学 校	中島 努
	品 川 区	伊 藤 中 学 校	田井 公子
	大 田 区	大 森 第 二 中 学 校	○小池 恭子
	板 橋 区	赤 塚 第 二 中 学 校	柴田 道夫
	八 王 子 市	中 山 中 学 校	◎竹信 文朗
調 布 市	第 七 中 学 校	堀端あゆみ	
第 3 分科会 (書写班)	世 田 谷 区	芦 花 中 学 校	佐野 玉枝
	足 立 区	東 綾 瀬 中 学 校	○久保田尚代
	三 鷹 市	第 四 中 学 校	杉本 朋子
	杉 並 区	堀 之 内 小 学 校	伊東 典子

◎ 世話人      ○ 副世話人

(担当) 東京都教職員研修センター 指導主事 新飯田潤一

## 目次

I 研究主題設定の理由	1	(3) まとめ	10
II 研究の構想		2 第2分科会（文字言語班）	
1 基本的な考え方	2	(1) ねらい	11
2 研究構想図	2	(2) 指導の実際	11
3 研究の方法	3	(3) まとめ	17
III 研究の内容		3 第3分科会（書写班）	
1 第1分科会（音声言語班）		(1) ねらい	18
(1) ねらい	4	(2) 指導の実際	18
(2) 指導の実際	5	IV 研究のまとめと今後の課題	
			24

### 研究主題

## 伝え合う力を高める指導と評価の工夫

### I 研究主題設定の理由

「子どもたちの、活字離れが進んでいる」といわれて久しい。平成14年8月に発表された文部科学省国立教育政策研究所の「読書教育に関する調査」における小中高生の読書量の低下および、そこから派生する国語力の低下を伝える結果が、それを物語っている。また、一方では、パソコンや携帯電話の急激な普及により、ディスプレイに映し出された活字に接する機会は確実に増えている。そして、それは情報入手を行うためだけでなく、キーを押せばたちどころに文字が浮かび上がり、言葉を操ることが容易に行われる。さらには絵文字や記号までが手軽な伝達手段として大きな位置を占め、心の中にあるさまざまな感情もそれらの符号によって表され、日本語の論理的でわかりやすい表現、繊細な表現の理解を困難にし、自己表現も深められない人の増加につながっていると考えられる。また、自分自身の手で書いた文字で表現する機会も、日常生活において少なくなりつつある。そういった、子どもたちを取り巻く言語生活の変化は、コミュニケーションや言葉がつかなくはならずの人と人との関係までも変えようとしている。

本年度から、新教育課程に基づいた新学習指導要領が示され、教育活動がスタートした。「中学校学習指導要領」の中においても、「伝え合う力を高める」という目標を取り上げている。「伝え合う力」を「解説－国語編－」では「適切に表現する能力と正確に理解する能力とを基盤に、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉によって伝え合う力のことである」と定義している。つまり、「話すこと、聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域のバランスよい育成こそが、「伝え合う力」の育成につながると考えられる。

そのためには、自分の考えを論理的に話し、相手の立場や意見を尊重しながら、聞く態度、目的や場面に応じて適切に書く力、それを的確に読み取る力の育成を国語教育の中で重視していくことが必要である。多くの優れた文章や文学作品に接し、自分の表現に生かすことは、「言語感覚を豊かにし」「国語を適切に表現し、正確に理解する能力」の育成につながる。この能力を日常生活に役立て、自己を豊かにしながら円滑な人間関係を築き、さらには日本の伝統文化を尊重する態度を育むことは国語教育の本質的なねらいにつながる。

評価方法についても、新教育課程に基づきながら「新しい観点をもった評価方法」を工夫し、研究を進めていく必要性を強く感じる。「評価」は、生徒の力を伸ばし、次の学習に生かすべきものであるということを忘れてはならない。教師による評価はもとより生徒の相互評価・自己評価をより効果的に使い、評価の客観性・有用性を図りたい。

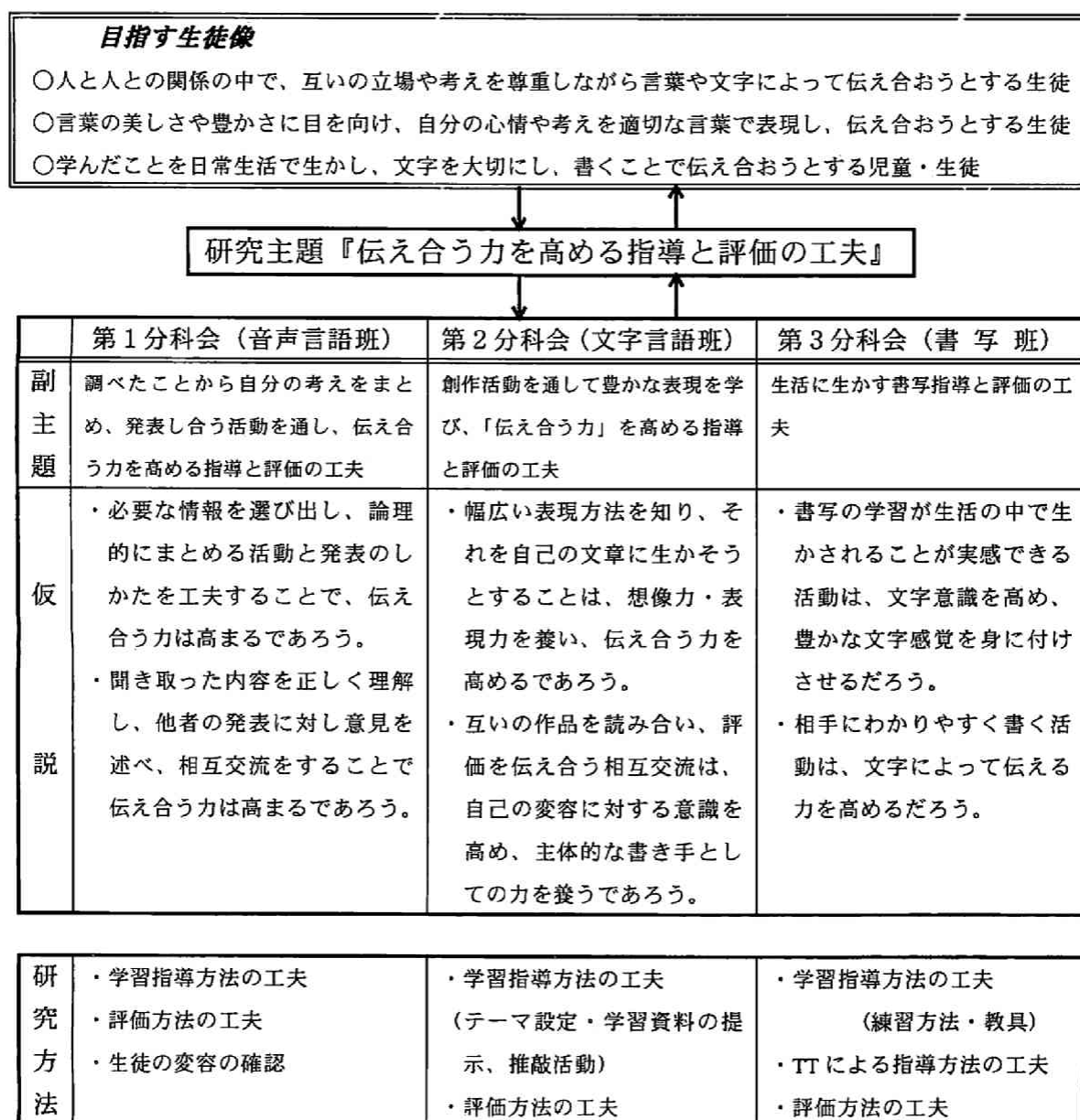
以上のことを踏まえたうえで、国語教育のよりいっそうの充実を図るために、本部会では、標記研究主題を設定した。

## II 研究の構想

### 1 基本的な考え方

学習指導要領では「伝え合う力を高める」ことに重点が置かれている。「伝える」ための手段は「音声」「文章」「文字」など多岐にわたるが、国語科の「伝え合い」としては「言葉を大切にすること」が必要ではないかと考えた。評価方法としては、学習指導要領に示されている目標に照らして、教師が評価規準を設け、適切にその実現の状況を見る評価と同時に生徒の学習活動の中で生徒がお互いを高め合えるような相互評価・自己評価をすることが「伝え合う力」を高める一助になると考えた。

### 2 研究構想図



### 3 研究の方法

「音声言語班」「文字言語班」「書写班」の三分科会に分かれ、それぞれ「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域と言語事項に重点をおいた指導方法・評価方法の研究を進めた。

#### (1) 第1分科会「音声言語班」

「音声言語班」では本研究の推進にあたって「調べたことから自分の考えをまとめ、発表し合うことを通し、伝え合う力を高める指導と評価の工夫」という副主題を設定し、発表を中心とした授業を展開した。発表にあたっては、「文字言語」に関する資料を使って要点を抽出した発表メモを作成させた。それを基にしてグループ内で発表をし合い、相互評価を行った。さらに、発表がより効果的になる改善点を示し合い、学級全体での発表会へとつなげた。発表を中心とした授業は生徒の意欲・関心を引き出すことが大切である。発表のよい所を述べ合うという相互交流をすることで、自身の発表がよくなるという充実感は、向上心を導くと考えた。

評価については、日常指導の中で、生徒の学習の改善に生かされることが重要である。評価をすることにより、生徒の力を伸ばさせ、さらに次の学習に生かしていかなければならない。そのために、指導内容を明確にし、評価規準・基準を具体化して、到達目標を明らかにした。自己（相互）評価表などのワークシートを効果的に使い、到達点を理解させ、今後の学習への喚起を促すよう試みた。

#### (2) 第2分科会「文字言語班」

「文字言語班」では、本研究の推進にあたって「創作活動を通して豊かな表現を学び『伝え合う力』を高める指導と評価の工夫」を副主題とし、文章の創作及び、相互評価を取り入れた推敲活動を通して授業を展開した。創作にあたっては、相互評価を行うことを踏まえ、共通のテーマを設定した。また、想像力と描写力の両面から表現力を高めることを考え、題材を決定した。さらに指導計画の中に、自分の伝えたい事柄や気持ちが相手に伝わるよう、文学作品の優れた表現を学び、それを自分の表現に生かす学習活動を組み入れた。推敲活動では、初稿作成の後、グループで文章を読み合い、評価・批評を行った。それにより豊かな視点、適切な表現を学び、深め合えることを考えた。

また、生徒が記述する原稿用紙を工夫し、相互評価、推敲といった学習の流れや、初稿から決定稿へ改善された点を見渡せるようにした。それにより、決定稿の相互評価では、完成稿の評価のみではなく、改善点における工夫を確認し合えることを目標とした。最後に自己評価を行い、まとめとした。

#### (3) 第3分科会「書写班」（小学校/中学校合同研究）

「書写班」では、本研究副主題を「生活に生かす書写の指導と評価の工夫」とし文字を正しく整えて書くという活動を通し、「伝え合う力」を高める研究に取り組んだ。

従来から指摘されている硬筆・毛筆の関連付けや、書写活動と日常書写との関連付けを充実させる必要から「書写の学習が自らの生活の中で生かされている」ことを実感できるような活動を授業に意図的・計画的に組み入れた。そこで、「文字で伝える」活動のひとつとして、小学校では「展示会のテーマを書く」、中学校では「はがきを書く」ことを試みた。その際、個別指導の時間を増やし、一人一人の課題に対する支援ができるよう TT 授業を工夫した。

評価については児童・生徒が自分たちで評価する機会を設けた。その際、評価カードを用い、相互評価・自己評価の工夫をした。また、児童・生徒の興味・関心を引き出し、学習活動を援助できるように、評価規準・評価基準の設定の研究を試みた。

## Ⅲ 研究の内容

### 1 第1分科会（音声言語班）

#### （1）ねらい

今年度から新学習指導要領による新教育課程が編成され全面実施となり、国語科では指導内容が二領域一事項「表現」「理解」「言語事項」から三領域一事項「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」に変更された。話す・聞く能力の重要性が強調され、改訂の中核に「伝え合う力」の育成が位置付けられた。

日常の国語の授業において、話す・聞く・書く・読むという基礎的、基本的な言語の力をバランスよく身に付けさせた上で、「伝え合う」場面をできるだけ多く設定したい。それによって得た力が自ら学び、自ら考える力の土台となり、「生きて働く力」につながっていくと考える。

また、「生きる力」の育成を図るために昨今よく取り組まれている課題解決学習や問題解決学習などにおいても、自分でテーマを設定し、調査し、まとめ、発表していく過程の中で最も必要とされる思考力は言語能力に負うところが多い。また、それまでの読書量も影響してくる。テーマに迫るための調査を進めていく際には、資料を読み解き、要点を把握する能力も要求されてくる。この力が身に付いていないと、単にインターネットや書物で調べてプリントアウトした資料の切り張りに終始することが少なくない。現にそういった学びを疑問視する中学生からの投書も新聞に掲載された。したがって、まず調査した資料から必要な情報を取り出し、自分の考えを深め論理的にまとめることが大切である。これには国語の授業においてテーマに沿って考える学習が必要である。そこで「文字で伝えること」というテーマの資料を基盤にした、発表形式の授業を展開することとした。

調べたことから自分の考えを論理的にまとめることができたならばそれを発信し意見交流することから、「伝え合う力」を育成したい。話す側は発音、声の大きさ、速さに注意し、聞く側も調査内容と考察、意見を区別しながら聞くようにする。その際、自己（相互）評価表を用いればより確実に発表内容を受け取ることができる。グループ内での発表の後、より質の高い話し合いができるようにする。今回同じテーマの資料を基盤においた調査・発表の形をとったため予備知識も興味もない分野の発表を聞くよりは、生徒たちは、問題意識をもって聞くことができ話し合いも深まるのではないかと考えた。話し合いの内容も聞き取った要点を自分の考えと比較したり、参考になった点を述べたり、質問をし合うことも可能であろう。

以上のように、調べた資料を根拠にして、論理的な構成を各自が工夫し自分の考えをまとめ、その発表や意見交流を通して「伝え合う力」を育成することを最終的なねらいとした。そして、このような取り組みの積み重ねが、国語に必要な「伝え合う力」の育成だけでなく、「総合的な学習の時間」や他教科における調べ学習や発表にも生かせると考えた。

本研究を通して「調査」・「まとめ」・「発表」・「意見交流」の方法を確実に身に付けさせ、自己（相互）評価や教師の評価を生かして、個々の生きて働く言葉の力を伸ばしていきたいと考えている。



## (2) 指導の実際

### ①【研究主題との関連】

#### 副主題

「調べたことから自分の考えをまとめ、発表し合う活動を通し、伝え合う力を高める指導と評価の工夫」

生徒の様子を観察してみると、友人との会話を楽しみ、Eメール等で自分の思いを伝えることは頻繁に行っているが、筋道を立てて正確に伝える経験が少ない。

第1分科会では調べたことをもとにして発表活動を行い、お互いの考えを伝え合うことで、研究主題に迫ろうと考えた。論理的な構成を工夫して、意見とその根拠とを結び付けて自分の考えをまとめること・発表内容を説得力のある表現方法にするための話し合いは、書く力と話す・聞く力の双方の育成につながる。

また、発表メモ、自己（相互）評価表、聞き取り要点カードを工夫するということは、伝え合う力を高めるとともに、具体的な資料によって客観的に評価できる指導と考える。

### ②【単元名】

「調べたことを発表する方法を学ぶ」

### ③【使用教材】

「テーマに沿って考えよう―集めた材料をもとに、意見文を書く」

生徒の調べた新聞、雑誌等の資料を使用する。

### ④【指導の手立て】

ア 調べた資料をもとに、論理的な構成を工夫して自分の考えをまとめる。

「文字で伝えること」というテーマに沿って自分で資料を調べ、必要な情報を取り出す。情報をもとに論理的な構成を工夫しながら、意見とその根拠とを的確に結び付けて自分の考えをまとめる。

これらの活動から、論理的表現力が育成され、それが伝え合う力の基礎を培うと考えた。

イ グループ発表会を行い、発表で工夫した点を話し合い、お互いの発表を説得力のある表現にするために意見を出し合う。

グループ発表会で互いの考えを発表し合い、発表に対し工夫した点について相互に意見を述べ合う。お互いの発表を説得力のある表現にする方法をカードに書き意見を出し合う。

これらの活動は目的に沿って効果的に伝え合う力を高めると考えた。

ウ クラス発表会を行い、要点を聞き取り、工夫した点を発表し合う。

発表内容を直し、クラス発表会を行う。その際、発表内容を聞き取るカードに意味段落ごとの要点をキーワードで書き込み、発表に対し工夫している点を書き、発表する。

これらの活動は、伝え合うことの大切さを知り、発表する力を高めていくと考えた。

### ⑤【単元目標】

ア 関心をもって課題に取り組み、自分の考えを深めようとしている。

(「関心・意欲・態度」)

- イ 意見とその根拠とを結び付けて、論理的な構成を工夫して話したり、聞いたりすることができる。 (「話すこと・聞くこと」イ・ウ)
- ウ 発表の要点を聞き取るとともに相互の考えを交流し、聞き手に対し説得力のある表現方法にするための話し合いを行うことができる。 (「話すこと・聞くこと」イ・エ)
- エ 音声の働きや仕組みについて関心をもちながら、適切な話し方と聞き方を理解し行うことができる。 (「言語についての知識・理解・技能」)

⑥【指導計画】(6時間扱い)

- 第1時 …「文字で伝えること」というテーマと学習のねらいを知り、資料を選び、報告し合う。資料から必要な情報を選ぶ。
- 第2・3時…文章作成の手順を知り、発表内容の構成を考える。論理的な構成を工夫しながら、自分の考えを原稿用紙にまとめる。
- 第4時 …発表メモを作成する。発表の準備をする。
- 第5時 …グループで発表する。話し手の工夫点を見付け、発表し合う。お互いの発表(本時)内容を説得力のある表現にする方法について意見を出し合う。
- 第6時 …自分の発表内容を見直す。クラス発表会を行い、聞き手は要点聞き取りカードに書き込む。発表者の工夫点を話し合い、発表する。

⑦【学習活動と評価の計画】(6時間扱い)

時	学習活動	具体的な評価規準	観点別学習状況の評価の基準		評価方法
			A(十分満足できる)	B(おおむね満足できる)	
第1時	○学習のねらいを理解し、資料を選び、報告し合う。	課題について関心をもち、進んで取り組もうとしている。(関)	課題に関心をもち、資料を選択しながら読み、活用しようとしている。	課題に関心をもち、進んで資料を読もうとしている。	ノート
	○「文字で伝えること」というテーマの資料から必要な情報を取り出す。	目的をもって資料を読み、必要な情報を選んでいる。(話ア)	目的をもって資料を読み、要点を押さえながら発表のために必要な情報を選んでいる。	目的をもって資料を読み、発表のために必要な情報を選んでいる。	資料
第2・3時	○文章作成の手順を理解し、発表内容の構成を考える。	情報を組み立てて、論理の展開を工夫している。(書ウ)	選んだ情報を効果的に組み立てて、論理の展開が明快な文章構成を工夫している。	選んだ情報を組み立てて、論理の展開を工夫している。	作成文章
第3時	○論理的な構成を工夫しながら、自分の考えを原稿用紙に記述する。	論理的な構成を工夫して、自分の考えを書いている。(書エ)	聞き手が分かりやすい論理的な構成を工夫しながら、意見とその根拠とを説得力のある書き方にしている。	論理的な構成を工夫しながら、意見とその根拠とを書いている。	作成文章



第4時	<p>○聞き手を想定して発表メモを作成する。</p> <p>○伝え合うことを目的とした発表の準備をする。</p>	<p>自分の考えを効果的に述べる発表メモを作成している。(話イ)</p> <p>音声の働きや仕組みについて関心を持ち、効果的に伝えるための準備をしている。 (言(1)ア)</p>	<p>自分の考えを効果的に述べる発表メモを、適切な語句を使って作成している。</p> <p>音声の働きや仕組みについて関心を持ち、より効果的に伝えるために工夫して準備をしている。</p>	<p>自分の考えを効果的に述べる発表メモを、語句を意識しながら作成している。</p> <p>音声の働きや仕組みについて関心を持ち、効果的に伝えるための準備をしている。</p>	発表メモ  観察
第5時  本  時	<p>○発表メモにもとづいてグループで発表する。</p> <p>○自己(相互)評価表に記入し、話し手の工夫点をグループで発表し合う。</p> <p>○お互いの発表をよりよくする方法について意見を出し合う。</p>	<p>自分の意見とその根拠とを結び付けて、発表メモをもとに話している。(話イ)</p> <p>自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を相互に交流している。(話エ)</p> <p>話し合いを通し、説得力のある表現方法を見付けている。 (話エ)</p>	<p>自分の意見とその根拠とを論理的に結び付けて、発表メモをもとに聞き手に分かりやすく話している。</p> <p>自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を複数の観点から見付け、自分の考えを深めている。</p> <p>話し合い活動に積極的に参加し、説得力のある表現方法を複数見付けている。</p>	<p>自分の意見とその根拠とを結び付けて、発表メモをもとに聞き手を意識して話している。</p> <p>自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を見付け、相互に交流している。</p> <p>話し合い活動を通して、説得力のある表現方法を見付けている。</p>	観察 作成文章  自己(相互) 評価表  カード又は ポストイット
第6時	<p>○自分の発表内容を見直す。</p> <p>○クラス発表会を行い、聞き取った内容を要点カードに書き込む。</p> <p>○自己(相互)評価表に記入し、発表者の工夫点を話し合い、発表する。</p>	<p>説得力のある表現にするために発表内容を見直している。 (話ウ)</p> <p>聞き取った内容を意味段落ごとにキーワードで取り出している。(話イ)</p> <p>発表者の工夫点を見付け、評価している。 (話エ)</p>	<p>聞き手の指摘を参考に、説得力のある表現にするために発表内容を見直し、目的に応じた言葉遣いになっている。</p> <p>聞き取った内容を意味段落ごとに正確にキーワードで取り出し、記述している。</p> <p>発表者の工夫点を複数見付け、適切に評価している。</p>	<p>聞き手の指摘を参考に、説得力のある表現にするために発表内容を見直している。</p> <p>聞き取った内容を意味段落ごとにキーワードで取り出している。</p> <p>発表者の工夫点を見付け、評価している。</p>	作成文章  聞き取り 要点カード  自己(相互) 評価表

⑧【単元の評価】

ア 関心をもって課題に取り組み、自分の考えを深めようとしている。

(「関心・意欲・態度」)

B：関心をもって課題に取り組み、自分の考えを深めようという意識をもって発表会や話し合いなどに参加している。

A：関心をもって課題に取り組み、自分の考えを深めるために積極的に発表会や話し合いなどに参加している。

イ 意見とその根拠とを結び付けて、論理的な構成を工夫して話したり、聞いたりしている。

(「話すこと・聞くこと」イ・ウ)

B：意見とその根拠とを結び付けて、論理的な構成を工夫して話したり、聞いたりしている。

A：意見とその根拠とを的確に結び付けて、論理的な構成を工夫して聞き手に分かりやすく話したり、聞いたりしている。

ウ 発表の要点を聞き取るとともに相互の考えを交流し、聞き手に対し説得力のある表現方法にするための話し合いを行っている。

(「話すこと・聞くこと」イ・エ)

B：発表の要点を聞き取るとともに、相互の考えを交流し、説得力のある発表にするための話し合いを通し、その観点を見付けている。

A：発表の要点を正確に聞き取るとともに、相互の考えを交流し、説得力のある発表にするための話し合いを通し、その観点を複数見付けている。

エ 音声の働きや仕組みについて関心をもちながら、適切な話し方と聞き方を理解し行っている。

(「言語についての知識・理解・技能」)

B：音声の働きや仕組みについて関心をもちながら、適切な話し方と聞き方を理解し行っている。

A：音声の働きや仕組みについて関心をもちながら、適切な話し方と聞き方を理解し発表の時に積極的に行っている。

【第5時指導案】

ア. 目標

- ① 論理の構成を工夫しながら、調べたことをグループで発表し合うことができる。
- ② お互いの発表に対し工夫した点について意見を相互に述べ合い、発表内容を説得力のある表現方法にする話し合いを行うことができる。

イ. 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導	1 本時のめあてを確認する。	1 グループ発表会を通し、説得力のある話し方があることに気付かせる。	

入	2 グループ発表会の手順を確認する。	2 グループ発表会の手順を確認させる。	
展 開	<p>3 グループで発表メモにもとづいて、順番に発表し合う。</p> <p>4 自己（相互）評価表の項目にもとづいて、発表に対してお互いに評価する。</p> <p>5 グループ内で発表者の工夫点についてお互いに意見を述べ合う。</p> <p>6 お互いの発表内容を説得力のある表現にするための方法について考え、話し合う。</p> <p>7 より効果的に発表するための工夫点を書き、意見を出し合う。</p>	<p>3 グループ発表の一人当たりの時間は三分程度とする。発表方法（①声量②話す速度③間の取り方）・内容（④構成の工夫⑤意見とその根拠）の五項目について、二段階（A・B）で相互に評価させる。</p> <p>4 発表者の工夫している点についてを自己（相互）評価表に書き込ませる。</p> <p>5 五つの評価項目に沿って自分の考えと比較しながら、話し手が工夫した点について、意見を述べ合う活動を行わせる。</p> <p>6 グループ内でお互いの発表原稿を読み合い、説得力のある発表にするための方法を話し合わせる。</p> <p>7 グループ内で効果的に発表するための工夫点を幾つかの観点から見付け、お互いに意見を出し合いワークシートに書き込む。</p>	<p>【観察・作成文章】</p> <p>○自分の意見とその根拠とを結び付けて、発表メモをもとに話している。（話イ）</p> <p>A：自分の意見とその根拠とを論理的に結び付けて、発表メモをもとに聞き手に分かりやすく話している。 B：自分の意見とその根拠とを結び付けて、発表メモをもとに聞き手を意識して話している。</p> <p>【自己（相互）評価表】</p> <p>○自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を相互に交流している。（話工）</p> <p>A：自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を複数の観点から見付け、自分の考えを深めている。 B：自分の考えと比較しながら、発表における工夫点を見付け、相互に交流している。</p> <p>【カード又はポストイット】</p> <p>○話し合い活動を通し、説得力のある表現方法を見付けている。（話工）</p> <p>A：話し合い活動に積極的に参加し、説得力のある表現方法を複数見付けている。 B：話し合い活動を通して、説得力のある表現方法を見付けている。</p>
まとめ	8 次時の予告をする。	8 発表内容を直してから、クラス発表会を行うことを伝える。	

### (3) まとめ

第1分科会では、「調べたことから自分の考えをまとめ、発表し合う活動を通し、伝え合う力を高める指導と評価の工夫」という副主題を設定し、全員が検証授業を行う中で、単元を構想するための仮説の絞り込みや、主題に迫るための指導と評価の工夫・改善を重ねていった。

ここでは、その過程で得られた成果と課題をまとめる。

#### ① 成果

「伝え合う力を高める」ために、一方通行で伝えるのではなく、相互交流し合えるよう、発表を中心とした授業を次のように工夫した。

##### ア 発表形式の工夫

グループ内発表の形式にしたことで、お互いの発表者の声も聞こえやすく、またお互いの意見も交流しやすくなった。また、お互いに発表について工夫した点を話し合った結果、自分の発表をより説得力のある内容にしたいという意識も生まれ、活発に話し合う場面をもつことができた。

##### イ 話し合い（伝え合い）の内容の工夫

同じテーマ「文字で伝えること」で資料を調べたため、より論理的なまとめ方と効果的な発表の仕方についての共通の話題ができ、話し合い活動もより深まった。共通のテーマを基盤にしたことは、話し合いが深まるという点で成果が上がった。また、お互いの工夫点を評価し合うことで子どもたちが達成感を得られ、さらに説得力のある発表にしていこうための話し合いをすることによって、次の目標に向かう意欲も高まった。

##### ウ 自己（相互）評価表の工夫

自己（相互）評価表の項目を整理して、短時間で容易に評価できるようにし、「論理的な構成を工夫しているか・意見とその根拠とを結び付けて話しているか」という二点に重点を置いて聞けるようにした。生徒達は重点ポイントを押さえて聞き、的確に評価し合っていた。評価基準をAとBの二段階にしたのも、生徒にとっては判断しやすかった。また、グループ発表ではお互いの工夫した点を発表し合ったことで、発表の工夫の仕方を理解できた。指導者が評価項目を説明するより、級友の発表から自らが気付いて学ぶことの方が、効果的な学習であった。多くの人の工夫点を自分の発表内容に取り入れようとする意図が感じられた。

#### ② 今後の課題

ア 音声による言語活動の評価方法として、教師による「授業観察」としたが、後に残らないものをその場で評価するため、評価の客観性を保つ上での工夫が必要となる。他の評価方法としてどんなものが考えられるか、工夫を重ねていきたい。

イ 話し合い活動をさらに深めるため、グループ内で発表内容を改善していく点について意見を出し合う活動を取り入れたが、その観点を見つけ出すことが難しかったため、改善点を指導者側がいくつか提示する必要があった。また、発表を聞きながら同時に評価表に記入させたが、その方法についてさらに工夫する必要があった。

## 2 第2分科会（文字言語班）

### （1）ねらい

和歌集の四季による部立てや、俳句の季語に代表されるように、日本人は古くから季節やその移ろいを敏感にとらえ、それを表す語いを豊富に持ち得てきた。日本語の語いの豊かさは、この季節感に由来するところが大きいと言える。しかし、自然との接触が少ない生活の中で季節感が薄れ、また「Ⅰ. 研究主題設定の理由」でも述べたように、読書量が減少している今の生徒の現状を考えると、語い力や表現力が不足してきていることは否めない。

そこで本分科会では、これらの問題を克服するために次のような方策を考えた。

まず、日本人にとって身近で取り組みやすい四季を題材とし、「季節感を伝える」というテーマを設定した。これは、諸感覚を十分に働かせて「秋」を体感し、自分の感じたことを豊かに表現することで、文章を書くことへの抵抗感を少なくしたいと考えたからである。

次に、ある程度の語いを用いて自分が表現したいものを伝えるための適切で効果的な文章作成の習得を目指して、韻文ではなく散文による創作活動を展開することにした。

そして、ワークシートを工夫することで、相互評価の学習活動を、単なる評価のやりとりで終わらせるのではなく、「伝え合う」ことの楽しさと意義を経験させ、日常生活の中で役立つ国語力の向上につながるように考えた。さらに、相互評価による自分の表現方法との違いの発見と、文学作品（宮澤賢治や夏目漱石等）ではどのような語いを用いてより高度な表現を行っているかを紹介することにより、自分の課題を発見させ、より豊かな表現を考え活用していく推敲作業につなげていく展開を計画した。

以上のことから、教科書教材からの発展学習として、自分たちが体感したもの・創作作品・参考資料・評価カードを教材として設定した。

### （2）指導の実際

#### ①【研究主題との関連】

##### 副主題

「創作活動を通して豊かな表現を学び、『伝え合う力』を高める指導と評価の工夫」

生徒の言語生活、特に文章表現活動において、自分の考えや気持ちを的確に表現し伝え合うことが難しい状況が多く見られる現状は「Ⅰ. 研究主題設定の理由」で述べたとおりである。

そこで第2分科会では、散文の創作活動を通して研究主題に迫ろうと考えた。自分が体感したことを適切な表現を用いて相手に伝えるためには、語いの使い方、語い力が必要であり、受け取る側にも表現を読み取る力や文字表現から想像する力が必要となる。この力の育成は、日々の生活の中で生かされるものであろう。

文章を書くことを苦手としている原因の一つに、語い力・表現力の不足が考えられる。本来、日本語は繊細で豊富な語いを持ち、中でも比喻による表現は豊かなイメージの広がりを見せてきた。これは、文字表現での相互の意思交流の中で生まれ鍛え抜かれてきたものである。

今回、相互評価を通して、互いの文章のよさや今まで気づかなかった語いや表現の発見をさせることで、自分の表現方法の改善点を見つけ、表現力の向上を図りたいと考えた。

また、先述した語いや表現の手本として、文学作品の豊かな比喩表現を生徒に提示することにより、言語知識・語いや力のさらなる充実を目指し、文字表現力の向上を図りたいと考えた。

以上のことを踏まえて副主題を設定し、学習活動としてどのように展開し、それをどう評価していくかを、研究対象に位置づけた。

## ②【単元名】

「体感したことを表現する方法を学ぶ」

## ③【使用教材】

「枕草子・春はあけぼの（初段）」

生徒の取材をもとに学習を深める。（参考資料については、分科会で収集・精選した独自の資料を用いる）

## ④【指導の手立て】

ア. 屋外に出て、感じたことをメモする。

→諸感覚を働かせて、季節を感じる。

イ. メモをもとに、感じたことを文章化する（初稿の作成）。

→材料をもとに文章にする。

ウ. 班単位で互いの作品を読み合い、「相互評価カード」を作成する。

→作品の中から優れた表現を見つける。

エ. 「相互評価カード」、「文学作品の資料」、「友達の作品」を参考にして、自分の作品を練り直す。

→優れた表現をとらえ、自分の表現に生かす。

オ. 完成稿を班単位で読み合い、再度「相互評価カード」を作成する。

→初稿と比べてよりよいものになっているか、評価する。

カ. 完成作品を学級単位で鑑賞する。

→お互いの作品を伝え合い、今後の文章表現に生かす。

## ⑤【指導目標】

ア. 意欲をもって課題に取り組み、表現力を高める。

【関心・意欲・態度】

イ. 読み手に共感を与える文章を書くため、効果的な表現を工夫する。

【「書くこと」ウ・エ】

ウ. 相手の立場を尊重するとともに、相互評価に基づいて適切な助言を行う。

【「読むこと」ウ、「話すこと」エ】

エ. 相互評価や資料をもとに、表現力向上につながる推敲作業を行い、文章を完成させる。

【「書くこと」オ・カ、「読むこと」オ、「言語事項」（１）ウ】



⑥【指導計画】（6時間扱い）

- 第1時 … 教科書教材からの発展的な学習としてのテーマとねらいを知り、体感したことをメモの形で記録する。
- 第2時 … メモをもとに体感した「秋」を班の中で発表し合い、初稿を作成する。
- 第3時 … 班単位で初稿を読み合い、相互評価を行う。その中から印象に残った表現を（本時）選ぶ。
- 第4時 … 各班から選ばれた表現を学級内で発表する。文学作品に書かれた「秋」の表現を知る。自己推敲を行う。
- 第5時 … 完成稿を作成する。
- 第6時 … 班単位で完成稿を読み合い、第3時以降の学習を通して向上した部分を確認する。第1時から第6時までの学習成果を自己評価する。

（第6時終了後、完成稿を教室や廊下に掲示することによって、表現の工夫をより多く確認し合える場を設定する。）

⑦【学習活動と評価の計画】（6時間扱い）

	主な学習活動	具体的な評価規準	観点別学習状況の評価基準		評価方法
			A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	
第1時	○学習のねらいを理解する。	今回の学習目標を理解している。（関）	今回の学習目標だけでなく、第2時以降の学習活動の展開も理解している。	今回の学習目標を大まかに理解している。	観察
	○教室の外に出で五感を働かせて秋を感じる。	テーマに沿った題材を収集している。（関）	作品を完成させることを意識しながら、自分から進んで題材を収集している。	テーマに沿った題材を、自分から進んで収集している。	観察
	○収集した題材をワークシートにまとめる。 【「取材メモ」の作成】	収集した題材を整理して記録している。（書ア）	収集した題材を感覚別に整理し、感じたことを添えて記録している。	収集した題材を感覚別に箇条書きの形で記録している。	ワークシート
第2時	○自分が感じた「秋」を班の中で発表し合う。	感じたことを聞き手に伝えようとしている。（話ア）	感じたことを伝えるだけでなく、そのように感じた理由も明確にしながらかえようとしている。	聞き手を意識しながら、感じたことを伝えようとしている。	発言 観察
	○「取材メモ」をもとに、創作活動を始める。 【「初稿」の作成】	収集した題材を生かして、文章を書いている。（書ウ）	収集した題材のメモをもとに、自分が体感したイメージを伝える工夫をしながら文章を書いている。	収集した題材のメモをもとに、第1時で体感したことを思い出しながら文章を書いている。	原稿

第3時 ( 本 時 )	○班単位で初稿の発表をする。	書き手が感じたことを読み取ろうとしている。(読ウ)	書き手の感覚を尊重しながら、書かれていることを読み取ろうとしている。	書き手が伝えようとしていることに注意しながら、内容を読み取ろうとしている。	ワークシート 観察
	○班の中で相互評価を行う。【「評価カード」の作成】	チェック項目と照らし合わせて評価をしている。(番カ)	チェック項目に基づきながら、工夫点や視点の良さなど、相手への助言を入れた評価をしている。	チェック項目に照らし合わせて文章を読み、評価している。	ワークシート
	○評価カードをもとに班内で話し合いをして、印象に残った表現を選ぶ。	班内の作品から、イメージの広がりがある表現を選び出している。(話エ)	評価カードをもとにして、印象に残った表現を学習のねらいに合わせて選び出している。	評価カードをもとにして、印象に残った表現を選び出している。	発言 観察
第4時	○前時に班内で選んだ表現を、学級内で発表する。	この表現のどこがよいかを根拠と合わせて発言している。(話ウ)	班内の話し合いや互いの評価に触れながら、班代表の表現のよい点や工夫点を適切に発表している。	他の班の人たちに選んだ理由をわかりやすく説明しながら、発表しようとしている。	原稿
	○文学作品に書かれた表現を味わう。	文学作品中の表現に触れ、表現のよさや工夫点を味わうことができる。(読ア) (言(1)ウ)	自分たちの表現との違いに気づき、表現のよさや工夫点を理解して味わうことができる。	自分たちの表現との違いに気づき、表現のよさや工夫点を味わうことができる。	ワークシート 観察
	○「評価カード」・他班の発表・「文学作品の資料」をもとに、自己推敲をする。	相互評価で指摘された部分を中心に推敲している。(書オ)	これまでの学習の成果を生かして、相互評価で指摘された部分以外にも注意して推敲している。	これまでの学習の成果を生かして、相互評価で指摘された部分を中心に推敲している。	原稿
第5時	○前時までの学習をもとに、作品を完成させる。【「完成稿」の作成】	伝えたいことがより明快になることを意識しながら文章を作成している。(書エ)	文章の構成に工夫が見られると同時に、表現しようとする内容に最もふさわしいと考えられる語句を選んで文章を作成している。	表現しようとする内容にふさわしいと考えられる語句を選んで文章を作成している。	原稿

第 6 時	○班の中で完成稿を読み合い、お互いの表現を読み味わうとともに、各自の向上点を確認する。【「評価カード」の作成】  ○本単元の学習活動全体の自己評価をする。	改善された点に気づき、気づいたことを相手に伝えている。(読ウ) (書イ・カ)  これまでの学習活動の成果を確認しながら自己評価をしている。(書カ)	初稿と完成稿を比べて改善された点に気づき、自分の表現との違いを確認しながら、考えたことや感じたことを相手に伝えている。  自分の表現の変化や向上点を確認するとともに、確認したことをこれからの文章表現にどのように役立てるかを考えて自己評価をしている。	初稿と完成稿から改善された点を読み取り、気づいたことを相手に伝えている。  自分の表現の変化や向上点を確認しながら自己評価を行っている。	ワークシート  ワークシート
-------------	---	--	--	--	----------------------

⑧【単元の評価】

- ア. 意欲をもって課題に取り組み、表現力を高めようとしている。
- B. 学習のねらいや目標を理解して課題に取り組み、自分の表現力を高めようとしている。
- A. 学習のねらいや目標を理解して積極的に課題に取り組み、表現力を高める意欲をもって参加している。
- イ. 読み手に共感を与える文章を書くために、効果的な表現を工夫している。
- B. 読み手に共感を与える文章を書くために、効果的な工夫しようとしている。
- A. 読み手に共感を与える文章を書くために、効果的な表現を工夫し、その表現を生かした文章を書いている。
- ウ. 相手の立場を尊重するとともに、相互評価に基づいて適切な助言をしようとしている。
- B. 相手の立場を尊重し、相互評価に基づいて適切な助言をしようとしている。
- A. 相手の立場を尊重し、相互評価に基づきながら、お互いを高め合えるように考えて、適切な助言を積極的に行っている。
- エ. 相互評価や資料をもとに、表現力向上につながる推敲作業を行い、文章を完成させている。
- B. 相互評価や資料を参考にして推敲作業を行い、表現力を高めた文章を完成させている。
- A. 相互評価や資料を十分に活用し、表現力の向上を積極的に意識した推敲作業を行い、文章を完成させている。

【第3時指導案】

ア. 目標

- ①書き手が伝えようとしていることを正しく読み取り、的確な助言を与える。
- ②読み取った内容を自己の表現活動に生かしていく態度を身に付ける。

イ. 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（方法）
導 入	1 本時の授業の進め方と「評価カード」の記入法についての説明を聞く。	1 相互評価することが、自分自身の表現力向上につながることを強調する。	
展 開	2 前時に作成した「初稿」を、班単位で相互評価する。 【「評価カード」の作成】 ・作品を読む。 ・原稿に記入する。 ・評価項目をチェックし、評価を記入する。 (4～5人×5分)	2 机間指導をしながら、活動の様子を観察する。誤りを指摘するだけでなく、良い点も探し出すよう助言を与える。	【観察、「評価カード」の提出】 ○書き手が感じたことを読み取ろうとしている。 A：書き手の感覚を尊重しながら、書かれて B：書き手が伝えようとしていることを注意しながら、内容を 読み取ろうとしている。  【「評価カード」の提出】 ○チェック項目と照らし合わせて評価をしている。 A：チェック項目に基づきながら、工夫点や B：チェック項目に照らし合わせて文章を 視点の良さなど、相 み、評価している。 手への助言を入れた 評価をしている。
	3 「評価カード」に書かれた内容を、班の中で確認する。 ・書かれたことについての質問。 ・書いた内容への補足。	3 意見交換を活発なものにするため、前もって進行役を決めておく。	【観察】 ○自分が評価した根拠を説明している。 A：相手への助言となる B：評価カードをもとに ように考えながら、 して、自分が考えた 根拠を明確に説明し ことを説明している、 ている。
	4 評価カードをもとに班内で話し合いをして、印象に残った表現を選ぶ。	4 安易に多数決で決めるのではなく、意見を述べあう活動を意識させる。	○班内の作品から、イメージの広がりがある表現を選び出している。 A：評価カードをもとに して、印象に残った 表現を学習のねらい に合わせて選び出し ている。 B：評価カードをもとに して、印象に残った 表現を選び出してい る。
	5 「評価カード」に本時の授業のまとめを記入する。	5 次回以降の学習活動につながるまとめになるよう助言する。	
ま と め	6 次回の予告を聞き、学習活動を理解する。	6 班内で選んだ表現を、次回、発表することを確認する。	

### (3) まとめ

第2分科会では、『創作活動を通して豊かな表現を学び、『伝え合う力』を高める指導と評価の工夫』という副主題を設定し、研究を進めてきた。ここでは、数回の検証授業を行いながら改善を重ねていく中で得られた成果と課題について、まとめる。

#### ① 成果

本単元の計画にあたり、特に工夫した点は以下の四項目である。

##### ア. テーマ設定の工夫

テーマの設定を「季節を伝えること」とした。身近なテーマであるため、多くの生徒が意欲的に題材収集を行うことができた。また、共通テーマを設定したことによって、相互評価も活発に行われ、「伝え合う」活動を深めることができた。

##### イ. 優れた表現の提示の工夫

文学作品の中の優れた表現に触れさせることにより、その表現が作者独自の選び抜かれた表現であることに気づかせたいと考えた。その結果、表現を高めていこうとする意欲を喚起することができた。これまで文学作品を単に「難しいもの」と感じていた生徒が、文学を身近なものとして認識し直したことも成果の一つである。

##### ウ. 原稿用紙の工夫

相互評価、自己推敲を行いやすくするため、独自の原稿用紙を作成した。初稿用紙では、行間の余白部分に周囲の評価を書き込めるようにした。しかし、文章を書く段階では思考力・集中力が途切れてしまう様子も見られた。原稿用紙の形式については、さらなる工夫が必要である。完成稿用紙では、自分の表現の工夫点などを記入する欄を作った。これにより、伝えたいことが明確になり、相互評価が充実したものとなった。

##### エ. 相互評価（「評価カード」）の工夫

相互評価を二回行い、さらに評価項目を初稿と完成稿で違うものにした。初稿では、原稿用紙の使い方など形式面での評価を中心とし、完成稿では、初稿で印象に残った表現が心情や風景がイメージできる表現力のある文章になっているかなど、内容面での評価を中心とした。相互評価を二度行うことで、自分の意見が他者の作品に反映されたかどうか確認することができた。一方的な伝達ではなく、「伝え合う」活動を展開するためには、複数の相互評価の機会を設ける必要があることを確信した。

#### ② 今後の課題

ア. 評価の工夫については、さらに検討が必要である。今回は「授業観察」を多く取り入れたが、これに専念しすぎると教師の援助・助言がおろそかになりがちである。したがって、評価の観点を明確に示し、短時間で確実に評価する方法を工夫する。

イ. 今回の研究では、文字言語で「伝え合う」ことを中心に学習活動を進めてきた。より効果的な学習をするためには、文字言語で表現する指導だけでなく、文字言語から読み取る能力を高めていく指導の工夫も必要である。

### 3 書写班

#### (1) ねらい

新しい学習指導要領は「伝え合う力」の必要性を提示している。「伝え合う力」とは「話すこと、聞くこと」であり、また「書いて伝達する」ことでもある。相手を意識して「文字を正しく整えて書く」という活動の中で、「伝える力」を養うことが、国語科書写の役割であると考えている。

児童・生徒の「文字に対する意識調査」からも多くの児童・生徒が「字をもっとうまく書きたい」と思っていることが分かった。児童・生徒が一人一人の文字意識を高め、豊かな文字感覚を身に付けるよう、指導方法、学習方法について一層の工夫、改善が必要とされる。

硬筆・毛筆の関連が叫ばれて久しいが、書写指導というといまだ「毛筆」による学習というイメージが強く、学習したことが日常の書写活動に関連付けられていかないのが現状である。児童・生徒も書写学習の文字と日常の文字は違うものと考えているのではないか。児童・生徒が、書写の学習が自らの生活の中で生かされていることを実感できるような活動を授業に意図的・計画的に組み入れることで、目指す児童・生徒像に近づくのではないかという仮説を立てた。こうした授業を実践することで日常化を図ることとした。

評価については、児童・生徒の「自らを知る力」「判断する力」を育てるために、児童・生徒が自分たちで評価する機会を設ける。元来の完成作品の評価に偏らず、児童・生徒の興味・関心を引き出せるような評価(援助)の方法を研究していきたい。

以上のことから本年度の分科会主題を「生活に生かす書写の指導と評価の工夫」とし、研究を進めることとした。

#### (2) 指導の実際

##### 中学校第1学年

##### ① 【研究主題との関連】

副主題「生活に生かす書写の指導と評価の工夫」

パソコン、携帯電話の普及によって、メールのやり取りはするが、1年に一度も手紙やはがきを書かない、また、手紙やはがきを受け取ったときの喜びを知らないという生徒も少なくない。そのような状況から、はがきの書き方を知り実際に書く活動を行うことによって、はがきという伝達手段による生活の中の書を考え、文字で伝えるということを考えるよい機会となると考えた。

##### ② 【単元名】

生活の中の書 「はがきを書く」 生徒のはがきを基にして学習する。

##### ③ 【指導の手立て】

ア 基礎・基本を定着させるための工夫

- ・国語の授業で手紙の書き方を学習したことに関連させ、書写の授業でも「はがきの書き方」に取り組む。

イ 意欲的に取り組み、達成感を得させるための工夫

- ・T・Tにより個別指導の時間や機会を増やす。
- ・相互評価を取り入れ、鑑賞の時間を設ける。

ウ 生活に生かすための工夫



- ・身近な教材を取り入れ、実際にはがきを出し、体験させる。
- ・掲示したはがきを鑑賞し合うことによって伝え合う意識を高める。

エ 評価の工夫

- ・自己評価と相互評価を行う。
- ・ポストイットを使用し、すぐに評価が見える形にする。

④ 【指導目標】

- ア 書写で学習したことを生活に生かす。
- イ はがきの書き方を理解し、漢字と仮名の調和や、配列・配置に注意して書く。

⑤ 【指導計画】(2時間扱い)

第1時・・・「前略」「草々」の練習をする。

はがきの書き方を理解する。

第2時・・・はがきを仕上げ、鑑賞し合う。

(本時)

⑤ 【主な学習活動と評価の計画】(2時間扱い)

時	主な学習活動	具体的な 評価規準	観点別学習状況の評価の基準		評価 方法
			A(十分満足でき る)	B(おおむね満 足できる)	
第 1 時	○いろいろな用具を使 って書く。「前略」 「草々」の練習をす る。	用具による印象の違 いを考え、はがきに 適した用具を選ぶこ とができる。(言3)	理解しようと し、進んで発 表している。	理解しようと している。	観察  練習用紙
	○はがきの書き方を理 解し、文面を考える。	はがき表書きの基本 (文字の大きさ、配 列・配置)を理解して いる。(言3)	文字の大きさ のバランスが よく取れてい る。	文字の大きさ を違えて書い ている。	
第 2 時  本 時	○はがきにまとめ書き し、仕上げる。	相手に伝えるという 目的を理解して工夫 して書いている。 (言3)	目的に十分に 配慮して書い ている。	目的に配慮し て書いてい る。	はがき  ポストイ ット
	○はがきを鑑賞しあ い、ポストイットに 感想を書いて友達 のはがきに貼る。	自分の気持ちを理解 してもらえよう に言葉や文字を意 識して書いている。(言3)	進んでよい点 を見つけ、は がきの書き方 に関する感想 を書いている	はがきの書き 方に関する感 想を書いてい る。	
	○学習カードで学習 のまとめをする。	参考になるところを 見つけようとして いる。(関)	学習カードに 参考になるこ とを意欲的に 書いている。	学習カードに 参考になるこ とを書いてい る。	学習カー ド

【第2時の指導案】

ア 目標

- ① 基本を理解したうえで進んで学習する。
- ② 姿勢に気を付けて書く。
- ③ 仕上がった作品を鑑賞し生活の中の書について考える。

イ 展開

	学 習 活 動	指導・支援上の留意点		評価規準・評価方法
		T 1	T 2	
導 入	1 用具を用意する。 2 本時の流れを確認する。 3 はがきの書き方について前時の復習をする。	○基本を理解した上で相手に伝える書になることを意識させる。 ○表書き、文面の中身について復習する。	○机間指導により用具の確認。 ○掲示し、説明する。	○学習に必要な教具を用意しているか。(観察)
展 開	4 はがきの文面を読み直す。 5 はがきの中の配置を考える。 6 練習をする。 7 実際にはがきにまとめ書きをする。 8 はがきを鑑賞しあう。	○書体はできるだけ行書とする。 ○姿勢について注意を喚起する。 ○言葉や文字を意識して書くように促す。 ○参考になるところなどを見つけるように促す。	○練習用紙を配り、書き方の説明をする。 ○机間指導により姿勢、用具の持ち方を注意する。 ○はがきを配る。机間指導によりまとめ書きが適切にできるよう助言する。 ○ポストイットを配る。 ○机間指導により感想の書き方を助言する。	○姿勢に気を付けているか。(観察) ○相手に伝えるという目的を理解して書いているか。(はがき) ○自分の気持ちを理解してもらえるように言葉や文字を意識して書いているか。(ポストイット)
ま と め	9 授業を振り返り、学習カードに記入する。 10 指導者から次時の予定を聞く。	○授業を振り返らせる。 ○生活の中の書について意識化させる。	○学習カードを配る。 ○机間指導をする。	○参考になるところを見つけようとしているか。(学習カード)

ウ 評価

- ① 基本を理解したうえで進んで学習できたか。
- ② 姿勢に気を付けて書くことができたか。
- ③ 自己の文字を生活の場に生かすことができたか。

小学校第3学年

① 【研究主題との関連】

副主題「生活に生かす書写の指導と評価の工夫」

ひらがなは、私たちの日常生活の中で最も多く使用されている文字である。特に既習の漢字が少ない小学校低学年・中学年の児童のひらがなの使用頻度は非常に高いと言える。ひらがなの筆使いの特徴を知り、漢字との違いに気をつけて形を整えて書く学習が、日常生活する文字を整えて書くことにつながると考える。

ひらがなは、第1学年より硬筆で学習しているが、児童の実態から、繰り返し指導することの必要性を感じる。毛筆を使用することによってひらがなの筆使いの特徴を児童が理解しやすくなり、正しい筆使いの習得ができるのではないかと考える。さらに、毛筆の学習を生かして「展覧会のテーマ -みつめよう 耳をすまして 心でかんじて-」を書き、学校の玄関と展覧会会場に掲示するという活動を行うことで日常化を図っていくことができると考えた。

② 【単元名】 ひらがなの筆使いを知ろう 『にじ』 毛筆

③ 【指導の手立て】

ア 基礎・基本を定着させるための工夫

- ・用具の準備、片づけと、用具の扱い方になれる。
- ・書く時の姿勢について、常に児童の注意を喚起し日常生活においても意識化させる。
- ・学習カードを活用することで、課題を明確にし、自己評価や相互評価に役立てる。

イ 意欲的に取り組み、達成感を得させるための工夫

- ・T・Tにより個別指導の時間や機会を増やす。
- ・課題に沿った練習方法で練習する。
  - 練習用紙による練習……正しい筆使いの定着を図る。始筆の角度を知る。
  - 二色筆による練習……穂先の通り道を知る。
  - 水書用紙による練習……正しい筆使いの定着を図る。
  - 色砂に指で字を書く練習…筆使いの感じをつかむ。筆脈を確かめる。

ウ 生活に生かすための工夫

- ・学んだことを他の文字にも広げていく。
- ・相手や場を考え、ひらがなの筆使いに注意して展覧会のテーマを書く。

エ 評価の工夫

- ・試書（試し書き）をし、基準に照らし合わせ、自分の課題を見つけさせる。
- ・試書とまとめ書きを並べて掲示し、どこが良くなったかが児童にわかるようにする。
- ・学習カードに成果や反省を記入し、自己評価をする。また、友達や、グループで相互批評をし、互いのよさを認め合う機会を作る。

④ 【指導目標】

ア 課題意識を持ち、主体的に取り組む。（関心、意欲）

イ ひらがなの筆使いを知る。（言語事項）

ウ 書写で学習したことを生かして、展覧会のテーマを書く。（関心、意欲）

【指導計画】（4時間扱い）

第1時・・・「にじ」の試し書きをする。ひらがなの筆使いの特徴を知る。

第2時・・・「にじ」の筆使いの練習をし、自分の課題を見つける。

第3時・・・課題に沿った練習をし、「にじ」のまとめ書きをする。

第4時・・・展覧会のテーマの文字を書く。硬筆で他のひらがなの練習をする。

（本時）

⑤ 【主な学習活動と評価の計画】 (4時間扱い)

	主な学習活動	具体的な評価規準	観点別学習状況の評価基準		評価方法
			A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	
第1時	○「にじ」の試し書きをする。	説明を聞き、進んで書くことができる。	既習事項を生かして、進んで書こうとしている。	進んで書こうとしている。	試し書き 観察
	○教科書の文字を見て、ひらがなの筆使いの特徴を知る。	ひらがなの筆使いの特徴を正しく理解することができる。	自分でほかの文字と比較して特徴を見つけ、正しく理解している。	正しく理解している。	観察 発表
第2時	○「にじ」の筆使いの練習をする。	とめ、曲がり、はらいの筆使いや方向に気をつけて「にじ」を書くことができる。	とめ、曲がり、はらいの筆使いや方向に気をつけ、正しく書いている。	とめ、曲がり、はらいの筆使いや方向を意識して書いている。	練習用紙
	○課題を見つけ、学習カードに記録する。	自分の課題を明確にすることができる。	自分の課題を明確にし、次の学習への意欲につなげている。	自分の課題を見つけている。	学習カード
第3時	○課題に沿った練習をする。	自分の課題に合った練習方法を選び、練習することができる。	意欲を持って自分の課題に合った練習方法を選び練習している。	自分の課題の練習をしている。	観察
	○「にじ」のまとめ書きをする。	ひらがなの筆使いに気をつけてまとめ書きをすることができる。	ひらがなの筆使いに気をつけ、正しく書いている。	ひらがなの筆使いに気をつけ、意識して書いている。	作品
	○学習カードに学習の成果を記録する。	自分の学習活動の成果を確認することができる。	自分の学習活動の成果を確認し、次の学習への意欲につなげている。	自分の学習活動の成果を確認している。	学習カード 発表
第4時 本時	○展覧会のテーマの文字を練習する。	今までの学習を生かして意欲をもって練習することができる。	今までの学習を生かして意欲をもって練習している。	今までの学習を生かし、練習している。	観察
	○まとめ書きをする。	今までの学習を生かし人に伝えるための文字を書くことができる。	今までの学習を生かし読む人を意識し、人に伝えるための文字を書いている。	今までの学習を生かし人に伝えるための文字を書いている。	作品
	○硬筆で他のひらがなの練習をする。	毛筆の書き方を硬筆に生かし進んで練習することができる。	毛筆の書き方を硬筆に生かし進んで練習している。	毛筆の書き方を硬筆に生かし練習している。	練習用紙

【本時の指導案（第4時）】

ア 目標

- ① ひらがなの筆使いに気をつけて、展覧会のテーマ「みつめよう 耳をすまして 心でかんじて」の文字を書く
- ② 人に伝えるための文字を練習し、まとめ書きをする。

イ 展開

	学 習 活 動	指導・支援上の留意点		評価規準 評価方法
		T1	T2	
導 入	1 本時のめあてを確認する。	○展覧会のテーマの文字を書くことを知らせる。	○机間指導により、用具の確認をする。	
	2 自分の書く文字を確認する。	○今までの学習を生かし、読む人を意識してていねいに書くことを確認する。		
展 開	3 展覧会のテーマの自分の書く文字を練習する。 ・色砂のコーナー ・水書用紙コーナー ・半紙に練習する。	○筆順、姿勢を確認し空書をする。	○色砂、水書用紙の使い方の確認をする。 各コーナーを回って指導、助言する。	今までの学習を生かして、意欲をもって練習することができる。（観察）
	4 まとめる。 色紙大の大きさに切った画用紙に毛筆でまとめ書きをする。  黒板に、まとめ書きを掲示する。	○めあてに沿ってまとめ書きができるよう確認をする。 ○机間指導をする。  ○掲示を指導する。	○机間指導をする。  ○掲示を指導する。	今までの学習を生かし人に伝えるための文字を書くことができる。 （作品）
ま と め	5 学習カードに自分の学習の評価を記入する。  同じ文字を練習した友達と相互評価をし記入する。	○学習カードに評価を記入するよう指示する。  ○課題を意識して評価ができるように支援する。 （主に窓側の児童）	○課題を意識して評価ができるよう支援する。 （主に廊下側の児童）	自分の学習活動の成果を確認することができる。 （学習カード）
	6 硬筆で他のひらがなの練習をする。 本時のまとめをする。	○練習用紙に練習するよう指示する。	○机間指導する。	毛筆の書き方を硬筆に生かし進んで練習することができる。 （練習用紙）

## Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本年度は「伝え合う力を高める指導と評価の工夫」を研究主題として研究を推進してきた。人と人の相互理解の大切さは、国際化・情報化といった社会の変化に伴い、重要性が高まっている。未来を生きる生徒たちにも「伝え合う力」の育成が切に望まれているのである。

「伝え合う力」とは、人と人との関係の中でお互いの立場や考えを尊重しながら、言葉によって伝え合う力のことである。それゆえ「伝え合う力」を高めるためには音声言語能力の育成と共に文字言語能力の育成も望まれている。今回は「音声言語班・文字言語班・書写班」に分かれて、領域の重点化を図り、主題に迫る指導方法を工夫した。

また、評価に関しては、「生徒一人一人の力を伸ばすもの・次の学習に生かすもの」という共通理解をもって臨んだ。具体的な到達目標を設定し、授業一時間の目的を明確化した。さらに、相互評価表やワークシートを効果的に用いることで、自己評価し、次の目標に向けた取り組みを生徒自身で考えられるよう工夫した。

「話すこと・聞くこと」の領域においては、目的や方向にそって効果的に話したり、相手の意図を理解しながら聞いたりする能力の育成を重視している。それは「話し手」「聞き手」としての能力を育成することであり、そのために、具体的に発表を通して相互交流することで、互いのよい所を伸ばすよう授業を展開した。その結果着実に自分の表現力が伸びているという充実感をもつことができ、次への目標へとつながるものになった。

「書くこと」の領域において、相互評価を取り入れたことは書き手である生徒の相手意識・目的意識を高め、表現や言葉の使い方を工夫する手だてとした。また、友人の作品をよりよくするためにお互いに意見を出し合うことは、ほとんどの生徒にとって初めての学習であったが、感じたことを相手に伝えるための適切な表現について改めて考える有効な方法となった。書くこと、伝えることへの意識の高まり、作文を楽しむ生徒の様子がかがえた。

書写の学習においては、研究にあたり「文字に対する意識調査」を実施した。そこでの「字をもっとうまく書きたい」という意欲を動機にし、意図的・計画的に日常生活に生かす書写学習を重ねることで文字意識が高まった。小・中合同で研究を推進し、TT 授業の工夫、評価に関する検討をしたことは、効果的だったといえる。自分の書いた文字が人に何かを伝える役割をすると意識し、喜びを感じて学ぶことは学習の深まり、広がりとなった。

### (2) 今後の課題

音声、文章、文字で伝え合うことを研究してきたが、今後さらにそれらの言語能力を高め、生きる力につながるよう研究を深めていくことが課題である。

#### ア 評価の工夫

適正な評価規準を定め、教師が適切に評価していく方法については、今後さらに深める必要があるが、生徒自身の自己・相互評価の力についても高めていく必要がある。

#### イ 指導の工夫

生徒の実態に即した教材開発、これからの授業の形態としてT・T、少人数指導の授業を工夫する。